

Assembly East 2017 乙 1 7 番テーブル 総評

ジャッジ：川本（立教 4） 神田（武蔵 4）

テーブルメンバー

林（法市 2） 沖重（上智 3） 鳴坂（慶應 3） 高橋（明学 2）

古積（東大 2） 上林（立教 3） 小野（高経 2）

議論の流れ

文責：神田

(Narrow)

沖重によりナローが始まり、OP には沖重、林、鳴坂の 3 人が立候補した。トピックはいずれも臓器移植であり、それぞれにいくつかの質問がなされた後、**contribution** について話したいという論点を示した林が OP となり、議論が始まる。

(ASQ)

ここでは **disease** による死とそうでない死の違い、**o/t** 以外で **Patient** を救える方法の有無、**rejection** する TG の扱い方など、「よくある質問」がなされた。しかし答えが返ってこないことや、×**consider** の回答が目立った。

(NFC)

まず初めに沖重による「**m/s/b for TG** が曖昧であるから、**priority** を立証してからでないと×**NFC**」という **obj** がなされた。**plan** を取る前の **s/m** と **plan** をとった後のマイナスを比べたいという主張に対し、マイナスというのは **o/t** をしなければ良かったという後悔であり、一つの **s/m** であることが林による質問により引き出され、コンパリで話そうという **S** が通り、話は収束した。

次に鳴坂の「**donor** は増え続けているから、現状維持のままでも **TG** は救われる」という **obj** の検証に入る。鳴坂の **a/l/1 increase organ** でいいのなら、**plan** を取らなくても **get AD** できるという主張に対し、高橋が OP は **plan** によって **a/l/1** を証明したいのであるという両者のスタンスの違いを明確にし、続けて林が **by mandate** による **room** を否定するべきであるとする。しかし鳴坂は **room** はあっても **result** がプランを取っても取らなくても一緒だったらお金が勿体無いという疑問をぶつける。この後に林や沖重によるサジェスションがなされるが通らず、また高橋が **keep SQ** では **cannot get organ** であるのが OP の定義であるから **TG** が違うとし、**DA** で話せるとするがこれも通らない。そこで林がプランを取ったら今よりも約 6 ヶ月早く臓器移植できるという **evi** を出すが、鳴坂は早くできるかもしれないが、**total** で得られる **organ** の数は変わらないと主張する。これに対し高橋が早くなるということは数も必然的に増えるとダウトをぶつける。これに対し鳴坂はそれを **additional**

AD として扱うなら認めるとし、話は収束した。

(Solution)

Praca で高橋による「ignore will だから A/con であることを、東京オリンピックの例と比較しながら証明したい」という obj がなされた。東京オリンピックは国民の意思を無視して行われるが、これは例外であることを OP のプランにより起こる ignore will の effect と東京オリンピックにおいての ignore will の effect と比べて証明したい、ということが沖重のカンファメのより明らかとなる。林は praca を証明するためには technology だけ確認できれば十分とするが、高橋は constitution を考えるべきとする。それに対し沖重が A/con だと何が問題であるのかを再度質問すると、cannot get organ と答え、高橋は praca は認めるが constitution に関しては×clear であるから worka の 4th linkage でもう一度話すとし、praca は証明された。その高橋の idea を worka で再び検証し始めたところで3時間が経過し、議論は終了した。

個人総評

文責：川本

《順位》

- 第1位 林（法市2）
- 第2位 沖重（上智3）
- 第3位 鳴坂（慶應3）
- 第4位 高橋（明学2）
- 第5位 古積（東大2）
- 第6位 上林（立教3）
- 小野（高経2）

《選定理由》

- 第1位 林（法市2）

オピニオンプレゼンターとして議論の進行へ貢献、他のメンバーのアーギュ検証において議論を推進する決定的な S によって、最も議論に貢献したため、この順位としました。林は角の立たない介入で立ち振る舞うのが上手く、周囲を味方にする事に長けていたように思います。ただ、変則的な S を打つからには、S で提示したエリアでどのように話せるのかを責任をもって考えてみてほしいです。ともあれ、3年生もいる中、しっかり結果を残したことは立派です。おめでとう。まだまだ実力を伸ばし活躍してくれることを期待しています。

- 第2位 沖重（上智3）

セオリーに基づく介入で議論の進行への貢献、積極的にダウトを提示していたことを評価

しました。一方で、PDD のプロソルに染まり切っていないメンバーがいたため、セオリーに留まらないアプローチができれば順位は変わり得たと思います。テーブルで議論を深めようとする雰囲気ができていたため、自身の介入に固執するのではなく、他者の発言をも利用して人を巻き込む議論を期待します。引退後も、ディス界に関わる機会は何かとあるので、沖重の先発介入やトリートの技術を、ぜひ後輩へのエデュケへ活かしてください。お疲れさま！

第3位 鳴坂（慶應3）

NFC でのアーギュを通して自身のアイデア提示をしていたこと、他のメンバーの意見を C で浸透させ議論に貢献したことを評価しました。鳴坂は、第三者視点の中立的な振る舞いと、テーブルに存在する複雑なアイデアを理解する力に長けていたように思います。しっかりと内容を議論する姿勢が素敵だと思うので、技術や姿勢を後輩に共有し、今後もディスカッションに関わる中で発揮して欲しいです。

第4位 高橋（明学2）

プラカアーギュを通じた自分の意見提示、鳴坂のアイデアにおいて他のメンバーの意見を汲んだ有効なダウトの提示を評価しました。春セミやアッセンを通して、似通ったアーギュで議論が行われるなか、高橋は独創的な仮説をもって議論を深めようとする姿勢で取り組んでいました。その姿勢を活かしつつ、セオリー上でも相手を納得させるだけのトリートやハンドリングを身に着け、さらなる成長を期待しています。

第5位 古積（東大2）

オピニオンプレゼンターの意見を引き出すための Q で介入していたことを評価しました。一方、他のテーブルメンバーの意見への介入が限定的であったため、コンスタントな介入、Q から議論の発展や推進につなげるアイデアや S によって、実力を伸ばしてしてくれることを期待しています。

第6位 上林（立教3）小野（高経2）

介入がなかったため。アッセンにて、何か感じることはありませんでしたか。ディスカッションという競技に、本気で取り組んでみるのも、他大学の人と関わるために楽しんで参加するのも、後輩に教えるために頑張るのも、関わり方はさまざまどれも正しいと思います。アッセンが、何かを頑張るきっかけになれば嬉しいです。

アッセン、お疲れさまです。

3年生、案外引退後もディスカッションに関わることは多いよ！みんながそれぞれ後輩に教

えられることって違うから、今まで得たことを還元して行ってあげてほしい。プレパして関わった後輩たちが頑張って結果残してくれるの、嬉しいものだよ。

2年生、ここからどう頑張るかが大事だよ！せっかく、アッセン期を通して出会った先輩がたくさんいると思うから、憧れる・好きなディスのスタイルの自大・他大の先輩に遠慮なくプレパ頼んで、どんどん実力を上げて行ってほしい。